



# APNME 2025 視察報告

19TH ANNUAL CONFERENCE OF  
THE ASIA-PACIFIC NETWORK  
FOR MORAL EDUCATION

2025.11.3-11.10

Naohiro MATSUO,  
Lanxin FAN  
Kota ASABU

# SCHEDULE

## 2025.11.4 (火) クアラルンプール日本人学校 訪問

## 2025.11.5 (水) 学会 1 日目

9.00 am – 9.30 am	歓迎の挨拶 カディジャ・モハド・カムバリ (ハンバリ) 教授 (博士)
9.30 am – 10.30 am	基調講演 1 『現状安住の倫理：理論から実践へ』 アジザン・バハルディン 名誉教授 (ダトゥク・博士) セッション 1 研究発表
11.00 am – 12.30 pm	開会の挨拶 アフマド・ザビディ・アブドゥル・ラザク教授 (博士) マラヤ大学
2.00 pm – 2.30 pm	教育学部長 セッション 2 研究発表
2.30 pm – 3.30 pm	セッション 3 研究発表
4.00 pm – 5.00 pm	※ 口頭発表「Perceptions and Expectations of Teacher Candidate Japanese University Students Regarding Conversational and Generative AI」

## 2025.11.6 (木) 学会 2 日目

9.30 am – 10.30 am	基調講演 2 『道徳・市民性教育に対するグローバルおよびローカルな影響：教授・学習における対話の促進』ウィール・ヴーゲラーズ名誉教授 (博士) ユトレヒト人文主義大学 (オランダ)
11.00 am – 12.30 pm	セッション 4 研究発表
2.30 pm – 3.30 pm	セッション 5 研究発表
4.00 pm – 5.00 pm	セッション 6 研究発表
7.45 pm – 10.30 pm	特別ディナー — ネットワーキングと APNME の探求

## 2025.11.7 (金) 学会 3 日目

9.00 am – 10.30 am	APNME コミュニティ・ビルド / APNME 年次総会 (AGM)
11.00 am – 12.30 pm	振り返りと共有のセッション (リフレクション & シェアリング)
3.00 pm – 9.00 pm	クアラルンプール市内名所への半日文化ツアー

## 2025.11.8 (土) 学会 4 日目 歴史都市マラッカへの日帰りツアー

## 2025.11.4 (火) クアラルンプール日本人学校 訪問

### <概要>

- ・クアラルンプール日本人学校の関野中学部教務主任に学校案内、説明をしていただいた。
- ・現校舎は3代目。1966年に設立されたキアペン校舎が初代にあたる。
- ・日本人学校は、現在教職員が50名程度おり、約半分が文部科学省派遣教員である。この中には、任期後に日本で教職に就こうとしているプレ派遣教員や、日本の学校を退職後に希望をして派遣されるシニア派遣の教員も含まれる。残り半分は現地採用教員となっている。
- ・なお、校内での写真撮影は安全面を考慮し、指定された場合を除き、保護者も含めて固く禁止されている。



### <特色ある教育課程>

- ・6月から3月まで、週1回、「イマージョン・スイミング」を行っている。プールは幼稚部水遊び用、小学部用、中学部用の三つがある。中学部用プールは50mプールで水深が1.6mある。
- ・EC (English Communication : 英会話) の時間が週に2時間設定されている。現地の資格をもった人が担当し、少人数(8~10名程度)で行っている。日本人学校を準会場として受験できるのは英検2級までであるが、日本に帰国して受験し準1級を取得している生徒や、ほぼネイティブのような児童生徒もいる。
- ・敷地内に、バナナ・パイナップル・マンゴーの木があり、小学1年生は生活科で「フルーツ体験」を行っている。
- ・小学4年生は、ピューター(錫)工場に見学に行く。
- ・コロナ禍を機にサークル活動という小学部5年生以上を対象としたスポーツ活動をやめ、小中ともに月に1回程度のクラブ活動を授業時間内に設定して行っている。

### <道徳科の授業>

- ・たまたま小学5年生で道徳科の授業が行われていた。「(祖母のりんご) [C. 家族愛, 家庭生活の充実]」
- ・「家族愛って何なのだろう?」というテーマについて、活発な議論が行われていた。
- ・児童は互いの発言に高い関心をもって耳を傾けており、交流の場面になると、全員が即座に積極的な対話を行っていた。
- ・校内事情によりこの学年の道徳を担当している小学部の教務主任は、児童の発言に対して、適切な場面で「実際にこんな経験は?」「正直な気持ちを話せる?」「3人の発言の共通点は?」などと問い返しを行い、話し合いを活発なものにしていた。

### <その他>

- ・グラウンドは東西2か所あり、大きい方の西グラウンドがソフトボール4面とれる規模であるなど、敷地は広い。
- ・気温が35℃以上になると、屋外での活動が制限される。
- ・跳び箱、マット、黒板クリーナー、ハードル、竹刀など、マレーシアには存在しない備品は、すべて日本から取り寄せている。
- ・保護者の多くは民間企業の駐在であり、3~5年程度で帰国することが多い。
- ・中学2年生の年度末または、3年生の1学期末の時期に、進路上の都合で日本に帰国(転校)する生徒も多い。マレーシアに残る生徒も少数いるが、その場合、インターナショナルスクールに進学するケースが多い。
- ・中学部への編入可能な時期は、中学3年生の6月1日までとなっている。



突然の訪問にもかかわらず丁寧に御対応いただいた教頭先生や関野先生をはじめ、関係の皆様には感謝申し上げます。

# 2025.11.5 (水) APNME 学会 口頭発表

<発表テーマ> Perceptions and Expectations of Teacher Candidate Japanese University Students Regarding Conversational and Generative AI  
〔教員志望の日本の大学生の対話型生成 AI についての認識及び期待〕

## <本研究の背景と目的>

近年、対話型生成 AI (Conversational and Generative AI、以降、CGAI。ChatGPT、Gemini、Copilot 等) の開発が急激に進んでおり、多くの一般の人が、安価または無料でそれらを使うことが可能になっている。産業やビジネスの世界においては、AI の効果的な使用が生産性を高め、イノベーションを生むうえで鍵となると言われている。しかし、少なくとも日本においては、教育の領域において対話型生成 AI を使用することは、学習者や生徒、教師のコンピテンシーの育成において有害になる危険性もあり、それらの使用においてはやや慎重な態度も見られる。本研究の目的は、教師を目指す日本の学生が、CGAI に対してどのような認識を持ち、どのような期待を抱いているかを明らかにすることである。

## <研究方法>

調査は 2023 年度から 2025 年度にかけて実施され、対象は必修科目「道德教育の指導法」を履修する教員志望の学部学生 1,522 名であった。調査は各年度の春学期後半に質問紙調査として実施し、Google Forms を用いて授業時間内に回答を求めた。質問項目は、CGAI に関する知識および使用頻度、使用場面、肯定的・否定的印象から構成され、いずれも尺度項目と自由記述を併用した。さらに、2025 年度調査では、これからの学校において必要だと考える AI 教育の内容や、小学生が CGAI を使用することへの賛否およびその理由についても尋ねた。量的データは R を用いて統計分析を行い、自由記述データは Python を用いてテキスト分析を行った。

## <結果>

CGAI に関する知識および使用頻度はいずれも調査年を追って増加しており、特に 2025 年度に顕著な上昇が認められた。学生の AI 利用経験については、多くが情報の確認や調査を目的として使用しており、一部には娯楽的に利用する学生もみられた。3 年間の推移を示した棒グラフにおいて最も顕著な変化は、2025 年における「相談」を目的とした AI 利用の急増であった。

肯定的印象については年々緩やかな上昇傾向がみられた一方、否定的印象は調査期間を通じて大きな変化は示さなかった。分散分析の結果、項目間の主効果、調査年の主効果、ならびにそれらの交互作用はいずれも有意であった。相関分析の結果、AI の使用頻度と知識の間には強い正の相関が認められ、これらはいずれも肯定的印象と中程度の正の相関を示した。

2025 年度データの詳細分析では、学校教育において特に情報の正しさを見極める力や、AI リテラシーに関する学習の必要性が高く認識されていることが明らかとなった。一方で、小学生による CGAI 利用については反対意見が賛成意見を上回り、その理由として、思考力の低下や主体的な学習機会の喪失、人間関係形成への影響に対する懸念が多く挙げられた。

## <考察>

教員志望大学生の間では、CGAI に関する知識と利用経験が着実に拡大しており、AI が身近な学習や調査を支援するツールとして受け止められつつあることが示唆された。また、人生相談や人間関係に関する助言などを目的として利用する学生が多くみられたことから、AI は単なる情報検索のためのツールにとどまらず、対話を通して感情や考えを共有できる「友人のような存在」へと、その位置づけが変化しつつあることが示唆される。一方で、初等教育段階における AI 活用については慎重な態度が強く、特に子どもの思考力や主体的学習への影響に対する懸念が大きいことが明らかとなった。これらの知見は、AI 活用の是非を二分的に捉えるのではなく、年齢段階に応じた AI 教育の設計が求められていることを示している。さらに、今後の学校教育においては、利便性の強調にとどまらず、情報リテラシーおよび倫理的視点を基盤とした AI 教育を体系的に位置づける必要があると考えられる。



# 2025年11月5日（水）-7日（金）（8日（土）） APNME 学会 全体での学び

## <概要>

- ・大会テーマは、「AI 時代における倫理と真正の対話」（“Ethics and Authentic Dialogue in the AI Era”）であった。
- ・基調講演、口頭発表、懇親会（特別ディナー）、年次総会、振り返りと共有のセッション、視察ツアー等が行われた。
- ・アジアからの参加者が多数を占めたが、ヨーロッパ、北米からの参加者もいた。

## <基調講演 1>

初日に行われた基調講演 1 は『現状安住の倫理：理論から実践へ』（The Ethics of Complacency: Moving Theory to Action）というテーマで、講演者はマラヤ大学のアジザン・バハルディン（Azizan Baharuddin）名誉教授であった。Complacency（日本語では「現状安住」「慢心」等の意味）をキーワードに、長年の研究と実践に基づいた興味深い講演であった。気候変動に伴う災害の増加、海面水位上昇、農作物被害等は、世界全体の脅威となっており、地域によっては既に深刻な状況にある。そのような状況下で「現状安住」であることは、将来的に大きな苦難を生むことになる。こうしたことから、世界中の子ども・若者は、大人以上に気候変動に強い関心を示す。気候変動等についての理論から、将来的な苦難を防ぐための実践に移行するためには、自然科学的な観点からだけでなく、倫理・道徳の面からのアプローチも不可欠であると感じた。

## <基調講演 2>

二日目に行われた基調講演 2 は、『道徳・市民性教育に対するグローバルおよびローカルな影響：教授・学習における対話の促進』（Global and Local Influences on Moral and Citizenship Education: Enhancing Dialogue in Teaching and Learning）というテーマで、講演者はユトレヒト人文主義大学（オランダ）のウィール・ヴーゲラズ（Wiel Veugelers）名誉教授であった。世界中で民主主義の危機が叫ばれており、それはグローバルなレベルでも、ローカルなレベルでも起こり得る。こうした世界的な状況に対して、道徳教育や市民性教育を適切に変化、拡充していく必要があるだろう。グローバル市民性教育（Global Citizenship Education）というのが一つのキーワードであり、様々な研究や実践が広がりつつある。非常に重要なテーマであるが、日本ではまだ研究者も実践家も多くないことを改めて実感した。

## <口頭発表：セッション 1～8>

大会テーマが「AI 時代における倫理と真正の対話」だったこともあり、AI やテクノロジーと道徳との関係について扱った発表が多く見られ、アジアをはじめ世界的に関心の高い領域であることが感じられた。「真正の対話」というのも非常に興味深い観点である。AI、特に LLM（大規模言語モデル）が飛躍的に発展し、人間と AI の対話が可能となった。初期には苦手としていた、「共感」を示す対話も少なくとも表面的には可能となり、否定的な応答は場合によっては人間よりも少ないため、個人的なことについて AI に相談する人も増えてきている。そこで、AI 相手にはできない、「真正な対話」とは何かの探究が始まっている。また、AI との言語的な対話では達成できない人間や社会についての理解とは何かという問いも重要になっていると思われる。人間が AI をどのような存在と認識しているかの調査、AI やテクノロジーを用いた道徳教育の検討、教員や教員志願者はどのようなことを学ばよいか等についての研究が見られた。

## <視察ツアー>

7日（金）の午後は、クアラルンプール市内の視察ツアーであった。マラヤ大学、中国寺院である天后宮、マレーシア国家の王宮であるイスタナ・ネガラ、ヒンドゥー教の聖地であるバトゥ洞窟、ツインタワー、セントラルマーケットを訪問した。8日（土）はマレーシアの歴史的な街であるマラッカを訪問し、ジョンカーストリートやマラッカ海峡モスク等を視察した。宗教施設、建築、食べ物や等、マレー、中国、インドの文化が融合している、多文化共生の実態が感じられた。2日間の視察を通して、世界中から来た参加者と言葉を交わし、親交を深めることができた。

